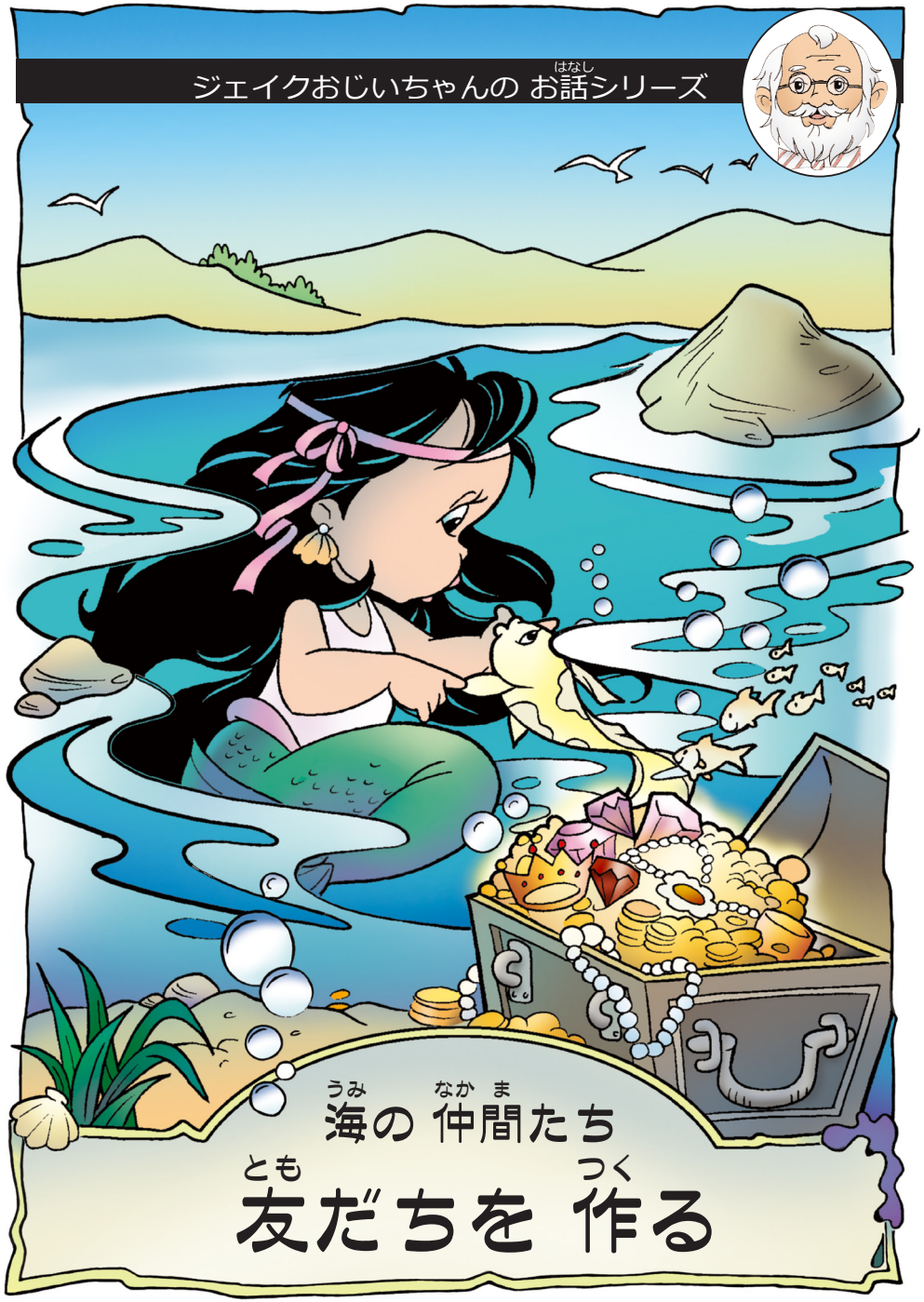


「ジェイクおじいちゃん！ 今夜は、どんな お話を 読むの？」と、トリスタンの 声が 聞こえてきます。

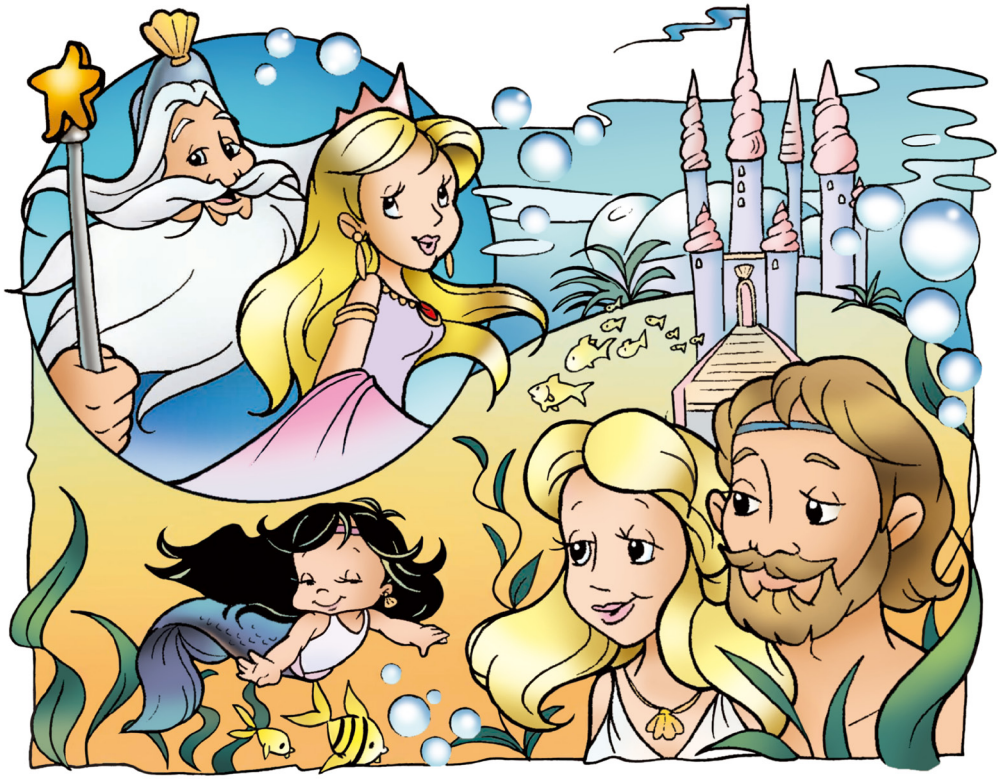
小さな 足が 階段を トントンと かけ下りる 音が 家中に ひびいたかと 思うと、おじいちゃんの お話を 聞くのを 楽しみに している トリスタンが、パジャマ姿で 入って 来ました。トリスタンは おじいちゃんの ひざの 上に 乗ると、ゆったり すわりました。

「昔々、大海原の 底に・・・」と、ジェイクおじいちゃんが お話を 読み始めました。

・・・カミールと いう、人魚の 子が いました。夜のように 黒い かみの毛を たなびかせ、尾は むらさき色の うろこで かがやいて いました。１つ、カミールが 他の 人魚たちと ちがっていた ことは・・・ カミールが、他の どの 人魚よりも、小さかったという ことです。

カミールの お父さんと お母さんは、カミールを 心から 愛していました。彼らは 他の すべての 人魚たちと いっしょに、 シャッダという 海底の 王国に くらして いました。シャッダは 美しい 王国で、やさしくて かしこい オーサン王と ザリア女王に 治められて いました。

お城の 塔は、カミールの お気に入りの 場所でした。カミールは 塔の てっぺんに すわって、王国の 中で 起こっている すべての 出来事を 見ることが できました。



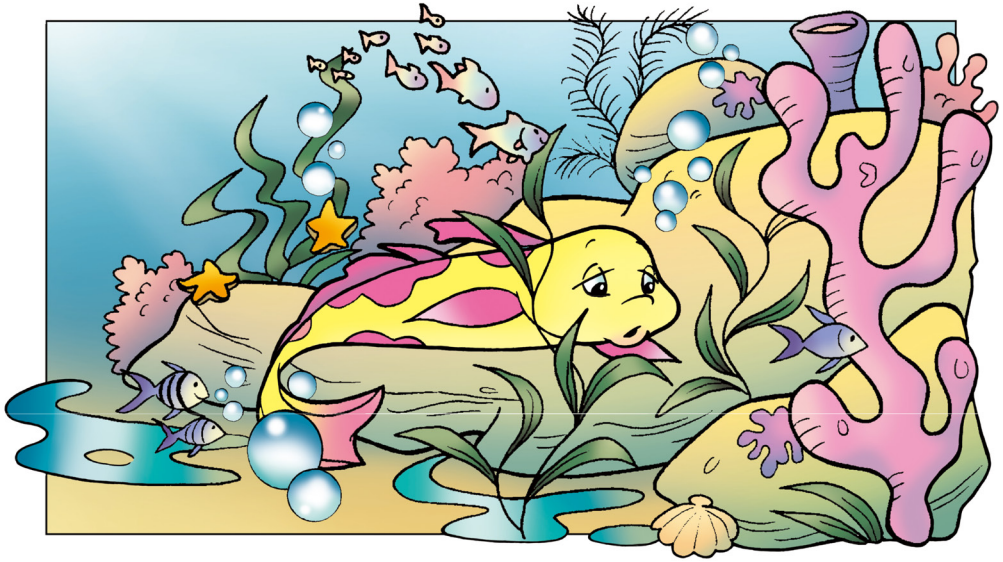
カミールには、
タツノオトシゴの
シャロと、カニの クリップと
いう、仲良しの 友だちが いました。
近くの サンゴしょうには、他の だれも 知らない、
３人だけの 特別な かくれ場が ありました。仲間たちと
いっしょに 過ごす 時間は、笑いと 楽しさに 満ちていました。

ある日の こと。クリップと シャロが 遊びに 来れなくて、カミールは
さびしい 思いを していました。カミールは 塔の てっぺんに 泳いで
行き、気分を 引き立てるために 歌を 歌いました。いつもなら これで
元気に なるのですが、今日は ちがいました。

大きな お城の 周りでは、みんなが お祝いの 準備を しています。
かざり付けを したり、ごちそうを 用意して いました。みんな、
大いそがしです。

（こんなに 小さいのって、いやだな。他の 人魚たちみたいに、
もっと 大きかったらなあ。そうしたら、パーティーの お手伝いが
できるのに。）と、カミールは 思いました。

カミールは べそを かき始めました。
（シャロと クリップ以外は みんな、
わたしの ことなんか 好きじゃ
ないのよね。だって、こんなに
小さかったら、王様や
女王様のために 何も
できないんですもの。）



さて、遠く はなれた 所に、色とりどりの 大きな サンゴしょうが ありました。そこには、様々な 魚や 生き物たちが 住んで いました。でも 1ぴきだけ、ぽつんと さびしそうに している 魚が いました。小さな ハゼの ゴビーです。

ゴビーは たいてい サンゴしょうに かくれて いるので、なかなか 目に つきません。とても はずかしがり屋なのです。

ゴビーは ため息を つきました。「友だちが いたらなあ。だれか、ぼくと 友だちに なって くれないかなあ。でも、無理だよね。だって、だれも、ぼくみたいな 小さな 魚と 友だちに なりたいなんて、思わないだろうから。」

その時です。遠くから、何やら にぎやかな 音が 聞こえて きました。海底の お城の 方からです。

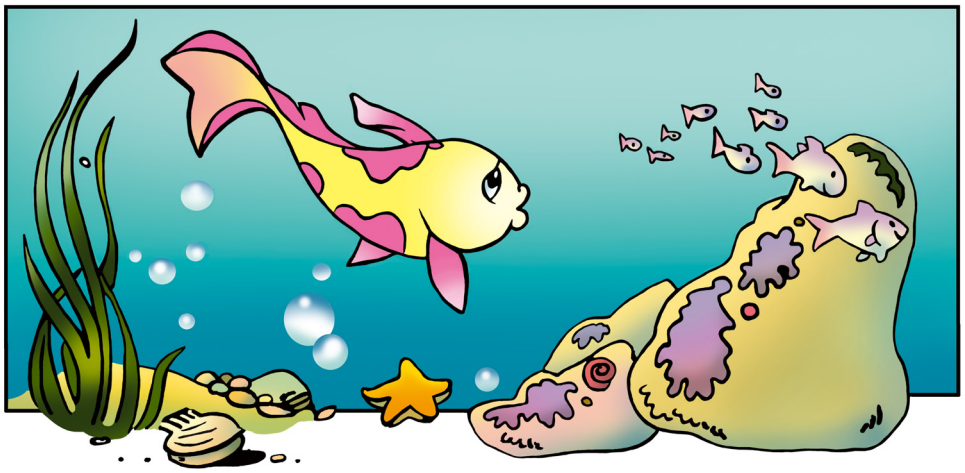
（お城で、何か あるのかな？）

ゴビーは、さっと サンゴしょうから 飛び出しました。すると、フグの バダーじいさんに ぶつかって しまいました。

「ごめんなさい、バダーじいさん。」 ゴビーは どもりながら 言いました。

「そんなに あわてて、何を 急いで いるんだい？」と、バダーじいさんが たずねました。

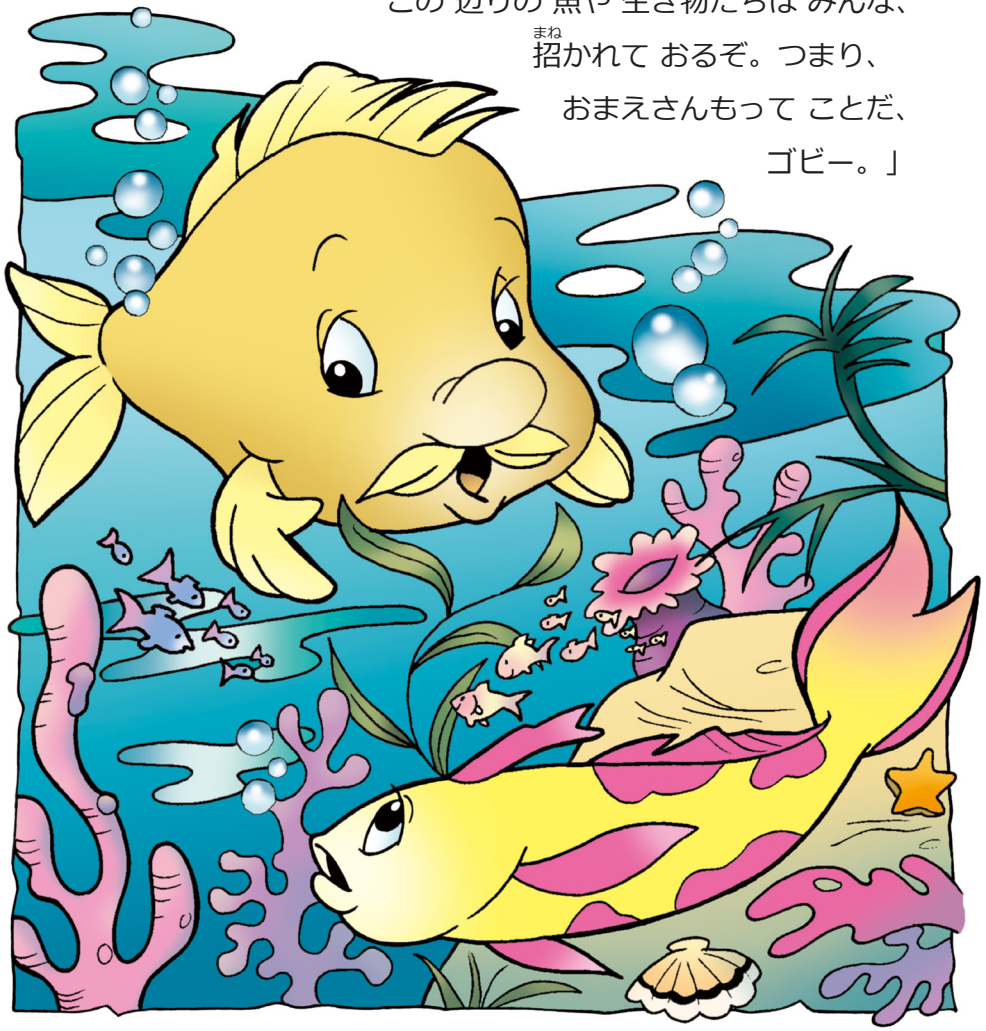
「お城の 方から、にぎやかな 音が 聞こえたので。何か あるんでしょうか？」



「聞いた ところに よると、キャディス王子の 5才の
たん生パーティーが あるそうだ。それで、王国中が その 準備で
大いそがしという わけさ。おまえさんは、お城の お楽しみに
参加する つもりかい？」と、バダーじいさんが たずねました。

「行っても いいのかなあ。」

「もちろん、いいに 決まってるさ！　聞いて いないのかい？
この 辺りの 魚や 生き物たちは みんな、
招かれて おるぞ。つまり、
おまえさんもって ことだ、
ゴビー。」



いっしゅん ちんもくが ありましたが、バダーじいさんは ひれを
パタパタ させながら、クスクスと 笑って 言いました。「小さな
ゴビー君よ、友だちって ものは、パパっと まほうのように 目の
前に 現れる わけじゃ ない！　自分から さがしに 行かなければ
ならんのじゃ！」

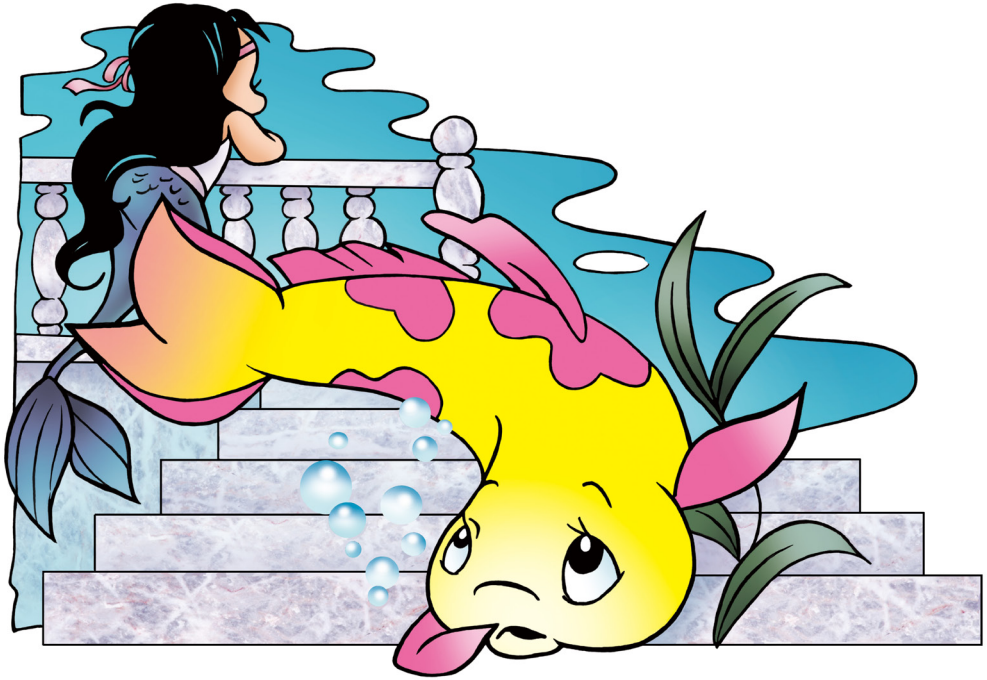
「だけど、どうやったら 友だちに なれるのか、分からないんです。」
と、ゴビー。

バダーじいさんは 笑って 言いました。「心配は ご無用さ。
魚当たり よく、親切で あれば、それで よろしい。
そうすれば、みんな、おまえさんと 友だちに
なりたがるじゃろう！」

「ありがとう、バダーじいさん。」
そう 言って、ゴビーは
お城の 方に 泳いで
行きました。

お城に 向かう とちゅう、ゴビーは 楽しそうな 笑い声を 耳に しました。ゴビーは とても はずかしく なって、魚たちの 群れから はなれ、すばやく 塔の てっぺんに 泳いで 行きました。塔の てっぺんに 着くと、小さな 人魚の 女の子が ひとりぼっちで 泣いて いました。

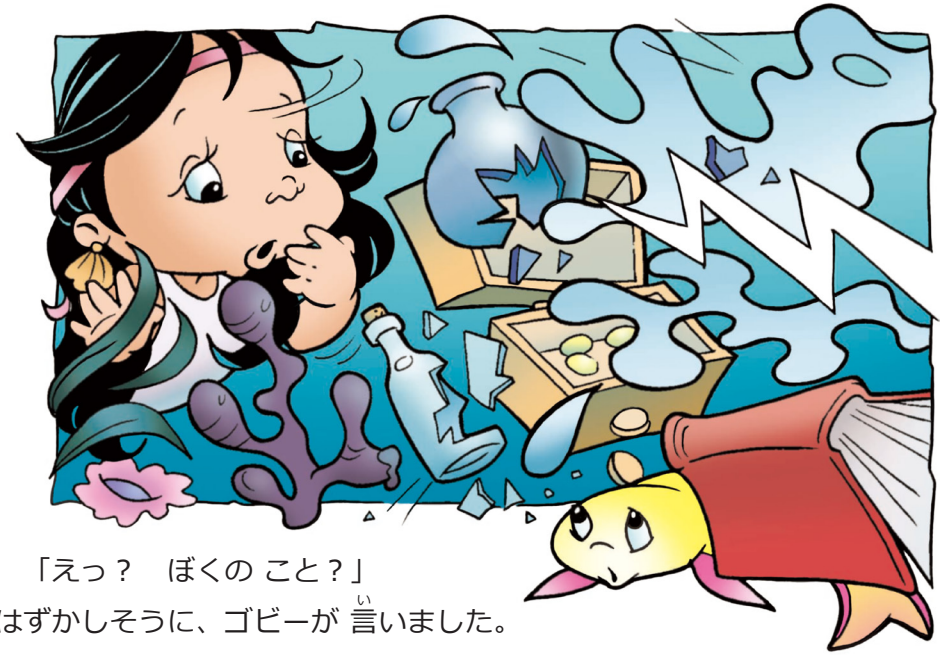
ゴビーは すぐに、塔から はなれようと しました。（きっと、今は だれにも そばに 来てほしく ないだろうなあ！）　そう 思った ゴビーは、あわてて いたので、尾が たなに ぶつかり、たなは 音を 立てて 地面に たおれて しまいました。



バタン！　カーン！　ガチャン！

カミールが ふり向くと、カラフルな 魚が さっと 通り過ぎました。何だろうと 思って、カミールは 魚の 後を 追いました。

「あなたは だあれ？」と、カミールが たずねました。



「えっ？　ぼくの こと？」
はずかしそうに、ゴビーが 言いました。

「そうよ。」　カミールは クスクスと 笑いながら 言いました。

「ゴビー。」

「初めまして、ゴビー。」

ゴビーも 言いました。「初めまして。散らかして しまって、ごめんなさい。」

「気に しなくて いいのよ。わたしも よく、その たなに ぶつかるの。いっしょに 片付けましょ。」と、カミールが 言いました。

ゴビーは はずかしく なりましたが、バダーじいさんが 言っていた ことを 思い出して、その通りに してみようと 思いました。

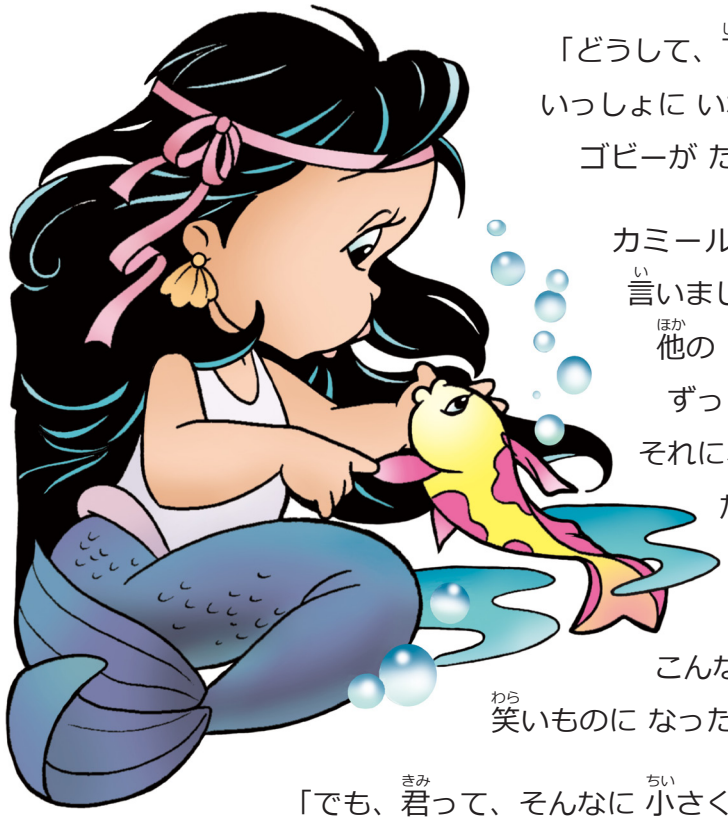
「ここへは、よく 来るの？」と、ゴビーが たずねました。

「ええ、わたしの お気に入りの 場所なの。だけど、あなたを 見かけるのは 初めてね。」と、カミールが 言いました。

「ずっと、ここへは 来て なかったからね。」

「ここって、ながめが 最高なの。ここからは、お城で 起こっている ことが 何でも 見えるのよ。」　塔の 手すりの 向こう側を 見ながら、カミールが 言いました。

二人は 下の 様子を ながめました。



「どうして、下の みんなと いっしょに いないの？」と、ゴビーが たずねました。

カミールは うつむいて 言いました。「わたしって、他の みんなよりも、ずっと 小さいでしょ。それに、おっちょこちょい だから、みんなの じゃまに なる みたいなの。こんなに 小さいから、笑いものに なったり するのよ。」

「でも、君って、そんなに 小さくは ないよ。ぼくなんて、こんなに 小さいじゃ ないか。」と、ゴビー。

「カミール・・・カミール！」　二ひきの 声が 塔に こだましました。

「あれは だあれ？」と、ゴビー。

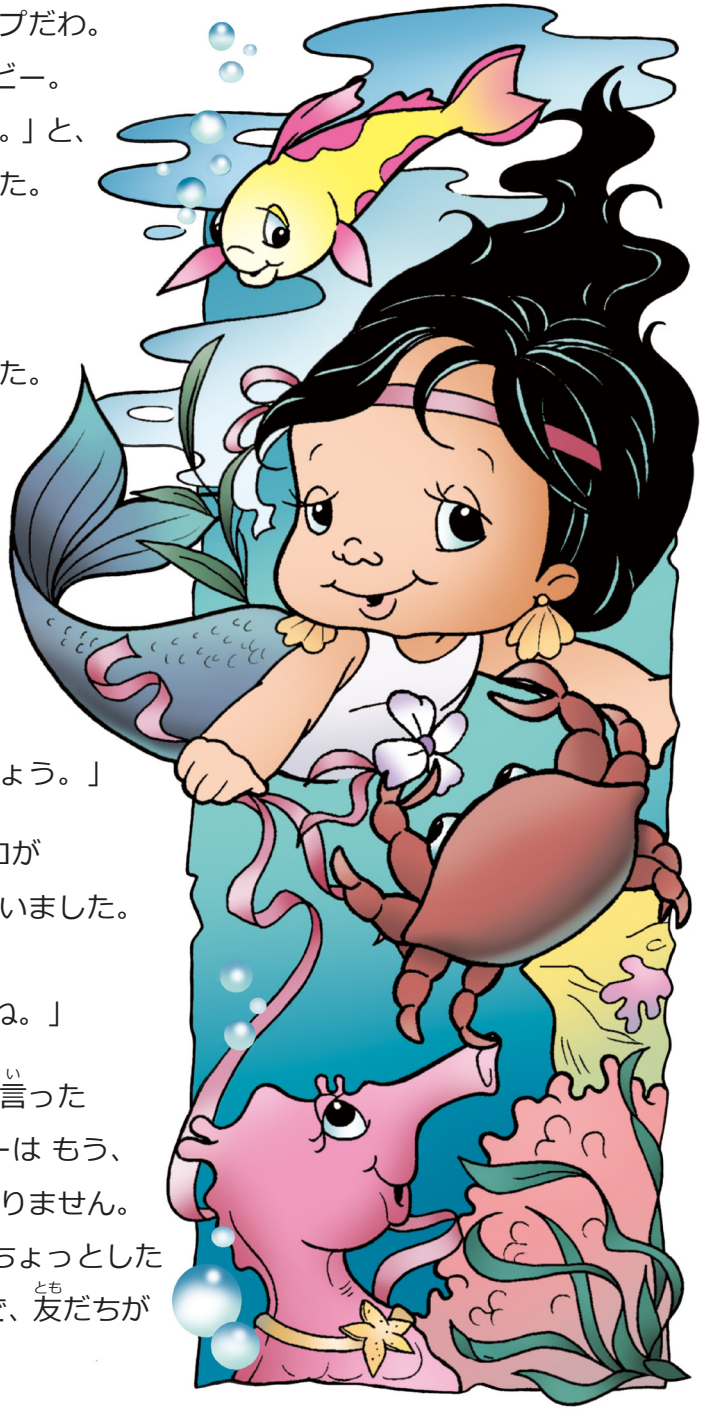
「シャロと クリップだわ。いらっしゃいよ、ゴビー。友だちを 紹介するわ。」と、カミールが 言いました。

「新しい 仲間が できたのかい？」と、クリップが 言いました。

カミールが ほほ笑んで 言いました。「新しい 友だちの ゴビーよ。サンゴしょうで いっしょに 遊びましょう。」

「うん！」　シャロが わくわくしながら 言いました。「新しい 友だちが できるのって、いいね。」

バダーじいさんの 言った 通りでした！　ゴビーは もう、ひとりぼっちじゃ ありません。悲しく ありません。ちょっとした 時間を 過ごす ことで、友だちが できたのです。



ジェイクじいさんが
本を 閉じると、
トリスタンが 言いました。
「友だちを 作るのって、
いいね。」

友情は、神様からの おくり物。
自分から 進んで 周りの 人たちに 話しかければ、
友だちが できて、ハッピーな 気持ちに なれるよ。

文：カチューシャ・ジュスティ　絵：アグネス・リメア　彩色：ダグ・カルダー　デザイン：ロイ・エバンス 掲載：マイ・ワンダー・スタジオ　Copyright © 2007年、オーロラ・プロダクションズAG、スイス、不許複製
“Grandpa Jake’s Storybook: Ocean Treasures: Finding a Friend”--Japanese　タグ：友情、ジェイクおじいちゃんのお話シリーズ、海の仲間たち、子供のための物語